**特別寄稿<マードックの印象>**

**マードック会見記　１９７１年**

**野中　涼**

　私は１９７１年の春、初めてロンドンへ行って、３７　Kirkside Road, Blackheathのメゾネットに１年半ほど住みました。私が書いたマードック論がちょうど出版されて、１５０ページばかりの小冊子でしたが、一冊を彼女（Cedar Lodge, Steeple Aston, Oxford）に送ると、せっかちな走り書きで‘We must certainly meet.’という手紙をよこしました。

　私の日記は、いま読むと、味もそっけもないメモふうの文章です。

　「６月１５日（火）晴、１１時にソーホー区のパブDuke of Wellingtonへ行く。男の客が３人いて、隅のテーブルで待っていると、アイリス・マードックが黒い服装で現れた。」すごくシックで、柔軟な体つきで、軽快そうに動く。シェリーのグラスを二つもらうと、おつりを、開いたままのバッグに投げこんだ。私がアルコールはダメだと知ると、コカコーラを注文してくれた。Irene Aliceは母親の名前だそうだ。’Nice’の意味も’kind, generous, but ego-centric persons’のこと。そして書きものは午前中１０時から１１時４５分まで、午後は４時から７時まで、’very regularly’ に机にむかって座ってやるそうだ。しかし、５０歳すぎて、この頃は右肩が痛む、だんだん書くのが辛くなってきた、と言う。ヘンリー・ジェイムズやドストイェフスキーのように、口述筆記ができるといいが、自分にはできそうにない。’Arthritisとボールペンで紙きれに書いた。禅については、鈴木大拙にフィリピンで会いたかったが、ちょうど亡くなって残念だったそうだ。そして質問する。禅はけっきょく’a mental state of perception’だろうか？ウェイリーの源氏物語、あれはすばらしい、オリジナルもあの訳文と同じだろうね？今、古い時代の日本を場面にした’very imaginary drama’を書いているが、登場人物の将軍や天皇や王女、武士にふさわしい名前をつけたい、それを教えてもらえないか？」

　この記録に少し細くすれば、一時間ほど話してから、週に一回この近くの女子大で倫理学を講義するためにロンドンに来る、これからをの時間だ、と言う。私が飲まなかったグラスのシェリーを飲みほして立ちあがると、’You should stay here a little longer.’と私にささやき、魔女のようにさっとパブを出て行きました。

　６月１９日に、芝居の人名を提案してくれ、という手紙がきました。私の住まいに電話がなく、彼女も大急ぎで手紙をなぐり書きするのか、いつも用件だけの、のたっくた字の電報文スタイル」でしたが、芝居が、どんな事件のどんな筋か、それさえ説明ぬきの身勝手な要請には感心せざるをえません。こっちも当てずっぽうにしか答えられない。無責任を気にしながれ、平安・鎌倉の時代の身分や人柄、信条で分けて、それに応じた名前を、思いつくままに書きならべて送るだけ。たとえば

　Yorimitsu　頼光＝reliability and light, or light to be relied upon.
　Tokuzan　徳山＝virtue and mountain, or religious and intractable man of power.
というような形で。７月１３日、８月９日にも、長い人名リストを書き送っています。

　しかし、実際に頼光、徳山、裕仁、栗壷、秋田、平川、弥寺などを、私が挙げたかどうか、記憶がはっきりしません。私のほかに学生か誰か彼女に提言する人が身近にいるようでもありました。ただ’Iris’は日本では’Ayame’で、昔から’a favorite for girls’だ、と私も伝えたことはまちがいありません。

　*The Three Arrows*（1972）が出版されて、１０月にオックスフォードで上演された頃、私はアテネに移り住んでいました。半年ほどして、１９７３年の春、帰国すると、学生騒動や授業や教務の雑用に巻きこまれました。シナリオを読んで、なんだこんな作品を書いていたのか、と知ったのは３５年もたった最近のことです。